

乳幼児を持つ母親の子育てに関する研究(I)

今井道子

(武庫川女子大学文学部教育学科初等教育コース)

A Study on Child Care in Mothers of Young Children(I)

Michiko Imai

Department of Education, Faculty of Letters

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan

The purpose of this study was to extract the factors that comprise the opinions and attitudes about child care in mothers of young children.

A list of 46 items on the opinions and attitudes about child care was compiled, and the respondents were asked to rate on a scale of one to six.

The subjects answered the questionnaire were 295 mothers who have young children. On the basis of the data from the questionnaire, a factor analysis was carried out by means of varimax rotation and the principal factor method. The number of factors was determined, and the items with factor loading of greater than 0.40 for any particular factor were used as representatives of the factor.

As a result, four factors were extracted and were assigned a name to each factor. They are described below:

(1) negative attitude (2) worth living (3) anxiety (4) early education

The relationships between child care with job and age in mothers of young children will be examined in following study.

緒言

最近、若い女性、若い母親の価値観や子どもへの意識は大きく変化してきている。蘭¹⁾(1989)によると、現代の女性・母親は、子どもと関わっているながらも、子どもは二の次、三の次であり、自分の生き甲斐を別に考え、育児に低い価値を置き、母親としての自信や誇り、生き甲斐を見い出せなくなってきているという。蘭は、このような意識の変化を「母親モラトリアム時代」と呼び、そうした状況を増大させた背景を次のように指摘している。まず、第一に命のしくみがわかり、命が授かりものでなくて、選ぶものになったこと。命を簡単に選択したり拒否したりできるようになったこと。第二に個人の生き甲斐を重視する価値観への変化。第三は、母親の価値を裏付ける共同イメージの喪失。子どもに価値を委ねられなくなり、人間同志の気持ちよりも生産志向、仕事志向になっているという実利主義の側面。第四に女性自らが男性化し、女性の価値や社会的地位や業績を男性と対等にあげるように努力したことによって、結婚や妊娠の高齢化が進んだこと。いっぽう、昭和30年代以降の我が国の経済発展は、人々の生活、特に就労状況に大きな変化をもたらし、女性の就労も著しく拡大した。例えば、昭和62年の女性就労人口を年齢別にみると、「20-24歳」の就労率が一番高く、72.5%あるが、「25-29歳」、「30-34歳」になると、この数字は前者49.68%、後者42.7%と低くなり、40歳になると徐々に高まるといふM字形就労傾向を示している。これは結婚・出産・子育てのために職を辞していく女性の多いことを意味し

ているが、近年においては、結婚後も退職せず、家事・育児と職業を両立させる女性も増え、育児休業の普及など労働条件の改善によって、その割合が一層多くなることが予想される。このように、有職女性の増加に伴い、有職女性の就労と子育てに関する研究も盛んになってきている。

長坂(1992)²⁾は、乳幼児を持つ母親の育児に関する調査で、子育てが楽しい仕事であるか、また負担になるかというアンケートを行っているが、子育てが楽しいと考えているのは、3か月児を持つ母親で、79.4%、3歳児を持つ母親は62.6%、幼稚園児の母親が55.2%となっており、年齢が高くなるほど子育ての楽しさが、下降して行っている。乳児で子どもの発育や発達、順調に行われ、母親側からの働きかけが、主体となって子育てが行われている時は楽しいが、年齢の増加とともに反抗期となり、母親の思うようにならなくなってきた時、子育てに対して少しずつ覚めた気持ちで対応するようになると思われる。

牧野(1982)³⁾は、乳幼児を持つ母親の育児に関する不安と母親の生活や意識の実態とがどのように関連しているのか。育児不安を高める要因は何かを検討している。この中で、育児不安に関連する要因は夫婦関係、母親の社会的な人間関係のあり方であると、とらえられている。また、母親自身の意識としては、子どもから離れるということが、育児不安の程度に大きく関係していると指摘されている。

青木(1986)⁴⁾は、有職・無職の母親の子育てに対する意識を調査し、子育てに対する否定因子と、母親であることに充実感を覚えるなどの肯定因子を見いだしている。また、専業主婦の方が、常勤・パートの職業を持つ母親よりも、精神的、肉体的疲労感を感じていること、子育てや母親役割の受容に対しての否定は、精神的、肉体的な疲労感、および育児への関与の低さと関係していることなどを明らかにしている。

このように、母親の職業やその他の変数と子育てに対する意識については、さまざまな角度から研究されているが、上で示したとおり、必ずしも一貫した結果が得られているわけではない。このことは、乳幼児を持つ母親の子育てが複雑な要因によって規定されていることを意味するものであり、それを解明するには、多角的な研究の集積が必要であることを示唆している。

以上のような観点に立ち、本研究では、乳幼児を持つ母親の子育てに関する意識を、母親の就労形態や年齢との関係をもとに明らかにすることを目的とする。先に今井・今井(1993)⁵⁾は日本保育学会においてその研究結果の一部を発表したが、本論文では、乳幼児を持つ母親で、常勤の職を持つ者、パートの職を持つ者、家事を専業とする者を対象に、46項目から成るアンケート調査を行ない、得られたデータについての因子分析の結果を報告する。

方 法

調査対象 現在、奈良県に住み、保育所、幼稚園に通う乳幼児を育てている母親295名である。その内訳は、職業別では常勤の職を持つ母親93名、パートタイムの職を持つ母親90名、いわゆる専業主婦が112名であった。年齢構成別では、26歳から30歳までの母親100名、31歳から35歳までの母親102名、36歳から40歳までの母親93名である。

調査期日 平成4年7月下旬から8月上旬にかけて実施した。

調査内容 乳幼児を持つ母親の子育てに関する意識を分析するために、乳幼児を持つ母親の生活と育児不安(牧野, 1982)において用いられている育児不安測定尺度を参考にして、I母親の役割、II早期教育、III心身の疲

Table 1. Subjects in the present study

	常 勤	パ ー ト	専業主婦	
26歳－30歳	34	34	32	100
31歳－35歳	32	30	40	102
36歳－40歳	27	26	40	93
全体	93	90	112	295

乳幼児を持つ母親の子育てに関する研究 (I)

劣, IV子どもの将来などに関する46項目の調査項目が選定され, 6件法による質問紙が作成された。

手続き 専業主婦として家庭にいる母親の場合は, 主として幼稚園に, 有職またはパートの職業を持っている母親の場合は, 主として保育所に調査用紙の配付と回収を依頼した。その後, 得られた資料から, すべての項目(逆転項目を含む)の評定値について, 「いつもよくある」に6点, 「かなりよくある」に5点, 「時々ある」に4点, 「たまにある」に3点, 「ほとんどない」に2点, 「まったくない」に1点を与えて得点化し, 46項目を用いて因子分析を行ない, 乳幼児を持つ母親の子育てに関する因子を抽出し, 命名を行なった。

結果と考察

まず, 乳幼児を持つ母親の子育てに関する調査項目が, 心理的にどのような意味内容を持っているかを検討するために, 主因子法, バリマックス回転による因子分析を行ない, 因子数を決め, 各因子の負荷量が0.40以上の項目をそれぞれの因子を代表する項目として採用した。因子は4つ抽出され, 全分散の33.55%を説明している。なお, 各因子の因子負荷量は, Table 2に示したとおりである。

Table 2. Factor structure for child care

項目	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子	共通性
21	0.6451				0.5971
11	0.6348				0.5619
8	0.6272				0.4623
32	0.6191				0.4767
41	0.5985				0.4277
29	0.5918				0.3781
30	0.5783				0.3634
42	0.5629				0.3908
34	0.4949				0.2913
1	0.4723				0.2341
16		-0.6804			0.5496
33		-0.6332			0.5133
2		-0.6273			0.4856
12		-0.6177			0.4422
37		-0.5641			0.4375
7		-0.5579			0.2996
28		-0.5352			0.3782
15		-0.4711			0.4218
38		-0.4698			0.2994
35		-0.4622			0.3833
26		-0.4510			0.3058
45		-0.4296			0.2648
39		-0.4050			0.2839
43			-0.5303		0.4192
14			-0.5212		0.4232
24			-0.5128		0.3720
19			-0.4680		0.3568
4			-0.4614		0.3390
18			-0.4372		0.3837
17				0.6537	0.4355
13				0.6399	0.4163
9				0.6193	0.4104
3				0.4303	0.2252
寄与率	11.859	10.740	6.343	4.611	33.554
	第1因子: 否定	第2因子: 生きがい			
	第3因子: 不安	第4因子: 早期教育			

Note: over 0.40 factor loadings were shown on this table

以下、各因子についてその特徴を探る。

第一因子について、因子負荷量の高い順にリストアップしたものが、Table 3である。その中の項目No. 21「できれば子育てをやめて、もっと自分の好きなことがしたいと思う。」、項目No. 8「この子がいるので、仕事やその他自分の好きなことができない、とらめしい気持ちになる。」、項目No. 32「子どもを育てていて、なんで自分だけがこんなに苦勞しなければいけないのか、とってしまう。」、などの項目により、「否定」の因子と命名する。

第二因子について、因子負荷量の高い項目を順にリストアップしたのが Table 4である。その中の項目No. 16「子どもを育てるのは、やりがいのあることだと思う。」、項目No. 33「子どもを相手にして一緒に遊んだりす

Table 3. Factor 1 (items over 0.40 factor loadings) $\alpha=.85$

項目番号	項 目 内 容	因子負荷量
21	できれば子育てをやめて、もっと自分の好きなことをしたい。	0.6451
8	この子がいるので、仕事やその他自分の好きなことができない、とらめしい気持ちになる。	0.6348
32	子どもを育てていて、なんで自分だけがこんなに苦勞しなければいけないのか、とってしまう。	0.6272
41	日々の生活に気持のゆとりがないと感じる。	0.6191
29	主婦はとかくがまんさせられることが多いと感じる。	0.5985
30	男性と比較して女性は損だと思う。	0.5918
42	食事、排泄、睡眠、洗濯、その他日々の子どもの世話がめんどろに感じられる。	0.5629
34	一日が終わると、ひどく疲れた感じになる。	0.4949
1	子どもが病気をしたり、けがをしたりすると、めんどろなことが増えていやだと思う。	0.4723

Table 4. Factor 2 (items over 0.40 factor loadings) $\alpha=.78$

項目番号	項 目 内 容	因子負荷量
16	子どもを育てるのはやりがいのあることだと思う。	- 0.6804
33	子どもを相手にして一緒に遊んだりすることは、楽しいと思う。	- 0.6332
2	子を持つ母親として、しみじみとした幸せを感じる	- 0.6273
12	子どもを育てるのは楽しいことだと思う。	- 0.6177
37	子どもを育てることで自分も成長していると思う。	- 0.5641
7	子どもはかわいいなと思う。	- 0.5579
28	子どもはかけがえない宝だと思う。	- 0.5352
15	子どもをあやしたり、子どもにことばをかけたり、子どもと遊んだりするのが、めんどろに感じられる。	- 0.4711
38	子どもがかわいいと思えない。	- 0.4698
35	いつも気持ちに張りをもって暮らしている。	- 0.4622
26	わが子の将来に期待をかけている。	- 0.4510
45	自分の子どもは将来性のある才能をもっていると思う。	- 0.4296
39	子どもに甘えられるといらいらする。	- 0.4050

乳幼児を持つ母親の子育てに関する研究 (I)

Table 5. Factor 3 (items over 0.40 factor loadings) $\alpha=.77$

項目番号	項目内容	因子負荷量
43	自分は子どもをうまく育てていないと思う。	- 0.5303
14	私には、子どもを育てる自信が持てないと感じる。	- 0.5217
24	子どもの教育のことで、どうしたらよいかわからなくなることがある。	- 0.5128
28	こどもはかけがいのない宝だと思う。	- 0.4987
19	自然の破壊・環境汚染・公害など、人の健康がそこなわれていくような状況の中で、わが子の将来に不安を覚える。	- 0.4680
4	政治・経済・社会・教育・科学技術などが激しく変わる最近の世の中の動きを見ていると、この子は将来どうなるのだろうかと不安になる。	- 0.4614
18	今の生活はなんとなく心に張りが感じられない。	- 0.4372

Table 6. Factor 4 (items over 0.40 factor loadings) $\alpha=.71$

項目番号	項目内容	因子負荷量
17	わが子にはできるだけ早くピアノとかスイミングなどのおけいごとをさせたいと思う。	0.6537
13	子どもが小学校に入ったら、塾に行かせたり家庭教師につけたりして、良い学校に進学させたいと思う。	0.6399
9	早く文字を覚えさせ、絵本など自分で読めるようにさせたい。	0.6193
3	せめて幼児期くらいは、おけいごととか、勉強などはさせないで、子どもを伸び伸びと育てたいと思う。	0.4309

ることは楽しいことだと思う。」、項目No.2「子どもを持つ母親として、しみじみとした幸せを感じる。」などの逆転項目により、「生きがい」の因子と命名した。

第三因子について、因子負荷量の高い項目を順にリストアップしたのが Table 5 である。その中の項目No.43「自分は子どもをうまく育てていないと思う。」、項目No.14「私には、子どもを育てる自信が持てないと感じる。」、項目No.24「子どもの教育のことで、どうしたらよいかわからなくなることがある。」などの項目により、「不安」の因子と命名した。

第四因子について、因子負荷量の高い項目を順にリストアップしたのが Table 6 である。その中の項目No.17「わが子には出来るだけ早くピアノとかスイミングなどのお稽古ごとをさせたいと思う。」、項目No.13「子どもが小学校に入ったら塾に行かせたり、家庭教師をつけたりして、よい学校に進学させたいと思う。」、項目No.9「早く文字を覚えさせ、絵本など自分で読めるようにさせたい。」などの項目により「早期教育」の因子と命名した。

謝 辞

本研究を行うにあたり、アンケート調査の実施については、奈良県橿原保育園および、くちなし保育園の先生方と保護者の皆さんにお世話になりました。また、データの整理については、奈良教育大学心理学専攻生冬木春子さん、田中秀明君にご協力頂きました。

(今 井)

参考文献

- 1) 蘭 香代子 母親モラトリアムの時代 180～183 北大路書房 (1989)
- 2) 長坂 紀子 1992 保育白書 6～13 草土文化 (1992)
- 3) 牧野カツ子 乳幼児をもつ母親の生活と育児不安 家庭教育研究所紀要, 3, 34-56 (1982)
- 4) 青木 まり 岩男寿美子・松井 豊 1986 母性意識から見た母親の特徴 心理学研究, 57, 4, 207-213(1986)
- 5) 今井 靖親・今井 道子 幼児を持つ母親の子育てに関する意識 - その2 - 日本保育学会第46回大会研究論文集, 98-99(1993)